

いのちの出遇い    いのちのやさしさ

## いのちの出遇い    いのちのやさしさ

丁 野 恵 鏡

皆さん、こんにちは。ただいま蜂屋学長先生から大変ありがたいご紹介をいただきましたが、ご紹介の中にありました『ないおん』誌で、日頃先生に大変お世話になっております。今日はそんなご縁で光華に寄せていただきました。もう一つは、はちきれんばかりの若い短大生の皆さんに出遇えるという楽しみもございまして、よろこんでおります。

後ろのほうに、幼稚園の久保園長がお見えでございますが、実は、光華幼稚園でも保護者の皆さんに『ないおん』誌をお読みいただいております、その編集のお手伝いをさせていただいているという因縁浅からざる関係で、本日お伺いしたようなことでございます。

皆さんのように私が大学へ行っていたのは、今から二十五年くらい前のことです。昭和三十四年の入学、三十八年の卒業ですが、それからまだ二年大学院におりましたので、今からだいたい二十五、六年前になります。

その頃ベトナムでは大変な戦争がありました。昨年二月に高島屋で「岡村明彦展」という、ベトナム戦争の写真展をやりました。先ほど蜂屋先生のお話にもありましたが、岡部伊都子さんと一緒にお手伝いして開いたのです。ちょうど皆さんが生まれる少し前でございます。岡村さんはカメラという小さな武器を持ってベトナム戦争にもぐり込み、悲惨な写真をたくさん撮った。それが世界の雑誌「ライフ」に紹介されて一躍有名になったのです。

岡村さんの写真を見ていくうちに、はっと釘付けになりました。「写真はカメラマンの位置を見よ」という言葉が目飛び込んできたからです。どういう意味かと考えてしまいました。つまり、写真を見るときは「ああ、きれいな写真だな」とか「構図がいいな」というような見方ではなくて、「写真そのものの奥にあるカメラマンの思想のようなもの、考え方のようなものをしっかり見てくれ」という叫びだったのです。

私は先ほどご紹介いただきましたように、保育園の園長をさせていただいておりまして、今

いのちの出遇い    いのちのやさしさ

年で二十一年目になります。ほんとうに子どもたちに申しわけないことばかりで、お恥ずかしい次第です。

六月の第二週に、園の職員の半数が沖縄へ研修旅行に出かけました。その時はちょうど実習生が来ておりまして、月曜日の午前中は実習生の保育を見てやってほしいということでした。私は、気楽な思いで九時すぎに三才児のクラスへ行きました。指導計画案は時の記念日にちなんで時計作りでした。三才児に時計なんてむずかしいことをさせるんだなあとは思いましたが、じっと見ていました。直径五、六センチくらいの丸い紙を配っているのです、ここに時計の文字盤を書かせるのかなと思っていて、文字盤ではなくて好きな絵を書かせて、出来た子から順番に実習生がベルトを付けてやっているのです。

ところが、実習生の計画した保育が三十分くらいで終わってしまいました。お昼までまだ時間があるので、「園長先生、どうしましょう」と言ってきました。適当にやってくればいいのにと考えたのですが、実習生にそんなことをいっても無理です。今までのんきに見ていたのに、立場が逆転してしまったのです。ふと子どもたちを見ますと、数人の子が机の下に潜り込み、横にいた子がいすをガタガタ動かして、「地震や、地震や」といって遊んでいるのです。

ああ、地震遊びをはじめたなと思ったので、私はとっさに楽器保管庫に走って行って、壊れかけた小太鼓とタンバリンとトライアングルを持ってきました。そして、「さあ、太鼓を鳴らしたらこの机の下に入ろ。トライアングルだったらこっちの机や。タンバリンだったらこっちだ」といって太鼓を鳴らしはじめたのです。子どもたちはワァーといって、はじめはよろこびました。次にタンバリンを鳴らすと、こちらに動くという具合でした。

二、三べんやっているうちに一人の子が、急に「ウェーン」と泣き出したのです。えらいこっちゃ。泣き出した。どうしようと思っていると、「怖いもん、怖いもん」といっているのです。「怖いことないやろ。地震といっても、太鼓を鳴らしているだけやから、怖いことないやろ」というと、「いやや、怖いもん」というのです。するとほかの子も次々に伝染したように、「怖いもん、怖いもん」といい出しました。「そうか、怖いのはあかんな。もうこれやめて、ほかの遊びをしよう。今度はフルーツバスケットしようか」ということで、いすをまるく並べました。しかし、一人の子どもがいすにでんと座ったままで、しらけてぜんぜん反応してくれないのです。なんとか動いてくれないかとあせるのですが、「どうしたの。おもしろくないのか」と聞いても、あい変わらずデーンと座ったままなのです。仕方がない、そっとしておこうと思い

いのちの出遇い    いのちのやさしさ

ました。「よし、やるぞ」といってやっていると、またさっきの子が「ウェーン」と泣くのです。「今度は怖いことないやろ」といっても、「怖いもん、怖いもん」といって泣き止まないのです。「怖いって、そんなに怖いか」と聞くと、皆が「怖い、怖い」と答えるのです。実習生が園長さんはどうするかなどじっと見ているので、私はますます困ってしまいました。こちらは模範保育をやらなければいけないのに、ちっともうまいかないのです。

そうしているうちに、また他の子が「先生、もうやめようや」というのです。今やりかけたところなのにやめようとは何ごとやと思っていると、だめ押しのようにもう一人の子が「先生、外へ遊びに行こう」というのです。私はがっかりしてしまいました。実習生に「外につれていってあげて」といって、肩を落としてすごすごと園長室に引き上げていきました。悪戦苦闘の一幕でした。

今、二十年も園長をやらせてもらっているといいましたが、私が龍谷大学を出したのはちょうど大学紛争の頃でした。これもご存知ないだろうと思いますが、皆さんがまだ幼年期の頃は日本中が大学紛争の最中で、ほんとうに騒然としていました。蜂屋学長先生はその頃は京都大学ではなかったでしょうか。大変だったと思います。あれは何だったんだろうかと今思います。

私は大学の職員をしていましたので、ヘルメットをかぶった学生と対決したり、夜中に封鎖された教室に潜り込んでオルグ活動をやったり、いろいろしたものです。

昭和四十五年に故郷の湖北へ帰って園長になりました。園長になった理由は、いずれは故郷へ帰らなければなりませんし、父が始めた保育園を継ごうというだけで、たいした理由もなかったのです。

そんな不真面目な私のところに、あるとき一通の手紙がきました。その手紙は年長児のユキちゃんからのものでした。お正月休みが明けますと、どこの幼稚園や保育園でも郵便ごっこというのをやります。それで、私にもときどきラブレターがきます。大方は「園長先生、元気ですか。私も元気にしています。また今度遊びましょう」というようなたわいのないものですが、ユキちゃんの手紙だけはちょっと変わっていて、わずか二行ほど、「先生はどうして園長先生になったんですか」と書いてあったのです。返事はすぐに出すことにしているのですが、その手紙を貰ったとたん、はたと困ってしまいました。どうして園長先生になったのかという問いに対する答えが出てこなかったからです。実はユキちゃんには、いまだに返事を書いていないのです。彼女はとくに二十歳を過ぎているはずで、ひょっとするともう結婚したかもしれま

いのちの出遇い    いのちのやさしさ

せん。申しわけないことをしてしまいました。

「先生はなぜ園長をしてるんや」という問いかけがそこにあったのですね。皆さんでいいますと、「なぜ光華短大の学生になったのですか」、「どんな願いや目標を持って光華短大に来てるのですか」という問いかけです。

先ほどの岡村明彦展では「写真はカメラマンの位置を見よ」という言葉がありました。ユキちゃんは「あなたのバックにある思想は何だ。あなたはこういう人生観を持って生きているのだ」と私に厳しく問いかけたように思えたのです。

それは非常にむずかしい問いかけです。しかし、いつか必ず私自身がそれに向き合わなければならない問いでした。私はユキちゃんの手紙で目が覚めました。それまでは「保育園の園長でも」といった安易な思いでした。非常に不真面目に生きていた私が、ユキちゃんのわずか二行の手紙で心にグサリとくるものを感じた。それは私にとって決して忘れられない出遇いとなりました。つまり、私のいのちそのものを問い直されたのです。

本日のテーマを「いのちの出遇い」とさせていただきましたが、つまりわれわれは、われわれの人生を通していろんなものと出遇っていく。朝出遇って、夕方には別れる。人生というも

のは出遇いと別れの繰り返しです。ボーイフレンドと別れたとたんに、またすぐ会いたくなる。数日して出遇う。また別れる。別れては出遇い、そしていつか永久に別れなければならぬ時が来る。人生はそういう繰り返しだと思っています。

今日もこうしてはるばる湖北から車を飛ばしてまいりましたが、途中で工事をやっていたものですから少し遅れました。途中、事故でも起こしていれば、もう皆さんとは出遇えなかったかもしれません。不思議な縁<sup>えん</sup>というか、こうして今出遇えたということのすばらしさを大事にしたいと思っています。

私にとってユキちゃんの手紙との出遇いは、いのちの出遇いといえるような出遇いだったと思います。つまり、「おまえは何者だ。どういう先生なんだ」との厳しい問いかけでありました。その手紙を貰ってから、私はほんとうに目が覚めたような思いで、一途に保育園の園長という仕事と向かい合い、自分の位置を見据えて二十年を生きてきたように思います。しかし、先ほども話しましたように、いざ子どもの前に立つともたましたりして、お恥ずかしい次第です。

ここに一つの作文があります。小学校四年生の朝倉サホさんの作文です。私はある団体の作



いのちの出遇い いのちのやさしさ

文コンクルの審査員を毎年やらせてもらっている関係で、応募されてくる作文をある雑誌にコメントをつけて紹介しているのですが、そのなかで出遇った作文です。「不思議な力」という題です。どんな作文か、皆さんにも聞いていただきたいと思っています。

友だちはふしぎな力を持っていると私は思います。お父さんやお母さん、兄弟にいけないことでも友だちにはいえることがあります。朝、お父さんに怒られたり、お兄ちゃんとかをしたりしていらしている時でも、友だちとおしゃべりをしているとすぐそんないやな気分は消えてしまい、気持ちも明るくなることがあります。

友だちはいいものです。皆さんもいつも友だちと話し合っているでしょう。朝倉さんもそうです。

友だちとけんかした時は「いやな人」とか思っても、二、三日しゃべらないとやっぱりさびしくなって、お互いに「ごめんね」といってすぐ仲直りできます。親友というわけではなくても、ありがとう、ごめんね、おはよう、こんにちは、さようならなどのあいさつを気軽にかわすことによって親しみが増えると思います。反対に、軽い気持ちでいった一言で友だちを傷つけてしまうことがあるし、気持ちが行き違ってしまうこともあります。

軽い一言で、そういうことだっと思ったら思います。

私も前にこんなことがありました。「あなた、前より太ったんじゃない」と夏休みが終わって、久し振りに出会った友だちについてしまいました。別にどういうこともなく、友だちという気安さからいってしまっただけです。でも、あとから考えると、友だちはそのことを気にしていたかもしれない。友だちは何もいわなかったけれど、傷ついていたのではないかと思います。

相手のことを思いやっていますね。

私だって、「髪の毛、少ないね」なんて、気にしていることをいわれていやな思いをしたことがあります。そのことを思い出して、本当に悪いことをいつてしまったなと反省し、それから気をつけるようにしています。いくら親しい友だちのあいだでも、言葉づかいのものはむずかしいなとつくづく思います。友だちにもいろいろな性格があります。思ったことは何でもかんでもずばずばいう人、いいたいことがあっても何もいえない人、人のいいなりになっている人、おせっかいばかりやいている人、すぐ怒ったり、泣いてしまう人といういろいろいますが、思ったことは何でも口に出してしまう人は、なるべく人を傷つけない

いのちの出遇い    いのちのやさしさ

いように気をつけたり、すぐ怒ってしまう人はなるべく怒らないように努力していると思います。私も家ではいいたいことをいうし、すぐ怒ったりしますが、学校ではそれほど怒ったりはしません。それはなぜでしょうか。別に意識して努力しているわけではなくても、友だちにきらわれたくないという気持ちがあるからだと思います。友だちのおかげで、自分のわがままな性格を自然におさえることができるのだと思います。このことから、友だちに不思議な力があるのだといえるのです。

時には友だちをいやだと思う時もあるけれども、いじめられそうになった時は、かばってくれたり、困った時、相談にのってくれたり、何倍も何倍も友だちっていいなと心から思います。これからも、もっともっと友情を大切にしていきたいと思っています。

こういう作文なのですが、朝倉さんは「不思議な力」というのを友だちの上に見ているのです。それは友だちに嫌われたくないからという意味でいっているところもありますが、四年生としては、こういうような考え方も当然だろうと思います。私はこの作文を読んで思うのですが、友だちを通してほんとうの自分に出遇っていくとか、「あの人と私とは違うよ」というかたちでほんとうの自分に出遇っていく。そういうことが私たちの人生のなかでは大変に意味が

あり、大事なことだと思うのです。

例えば、ボーイフレンドと話していたり、彼の行動やしぐさを見ていて、彼にはなくて自分にだけあるものに気づく。あるいは共感する部分がたくさんあることに気づくということがあ  
るでしょう。

つまり、今まで気づいていなかったほんとうの自分に気づいていくのは、実は自分自身によつてではなくて、他人を通してである。それは人間を通してだけではない。ありとあらゆるもの、社会など、いろんなものを通してほんとうの自分に気づいていく。今まで気づかなかったことに気づいていくことが実は非常に大事なことだと思うのです。

しかし、それに気づく人と気づかない人とがいるのです。気づかない人は常に「私ってなんだろう」という目を持って自分に目を向けていない人なのです。この世に生まれてきた私っていったいなんだろう。学校を出て就職して、結婚して、赤ちゃんは三人くらい産んで……。その後のことは全然考えていないと思うけれども、しかし何か考えなければならぬことです。そのように人生を通して「私ってなんだろう」という問いを持っている人は、いろいろなものに遭遇って、ほんとうのいのちそのものに気づいていきます。そのよろこびはすばらしいもの

いのちの出遇い    いのちのやさしさ

だと思っています。

彼とデートして、コーヒーを飲んでしゃべって、映画を見て、そして帰ってきて、音楽を聞いて一日を終わる。それもよろこびでしょうが、なにか虚しいですね。コンパに行ってわいわい騒いで、夜とぼとぼと帰ってくる。しかし、どこかさびしいですね。ところが自分というもののほんとうの姿に出遇うよろこびというのは、これはもうジーンとくるようなよろこびなのです。私はいつもそういうよろこび、そういういのちの出遇いを深めていくことが大事なことでないかと思っています。私の場合は、子どもさんがあたかも仏様の姿になって、私にそういう出遇いを与えてくれるように思っています。

大分前のことですが、こういうことがありました。年長児のクラスがトロ箱にハツカダイコンの種をまいたらしいのです。私はそのことを全然知りませんでした。日曜日の朝、園舎のほうを見ると、子どもたちが朝早くから園庭で遊んでいるのが見えました。

実をいうと、近所の子どもたちがしばしば園に遊びにきて、遊具をそこいら中に放り出していくので困っていたのです。子どもというのは、ほかのことに興味がわくとおもちゃをそのままにして、そちらのほうへ行ってしまうでしょう。翌日になって先生がそれを集めなければな

らない。私は月曜日に先生方に文句をいわれるのが嫌だから、今日こそは叱ってやろうと思ったのです。三十分くらいしてもう一度見ると、まだうろろうしている。いよいよ叱らないといけないと思って二階の自分の部屋から降りて、園庭のほうへソツと歩いて行っただけです。なるべくならソツと行って、脅かしてやろうと思って近づいて行っただけです。

遠くからはわからなかったのですが、近づいて見ると、園児の小柳ヤヨイちゃんと、妹で四才児の恵ちゃん、その下の妹の三人だったのです。そばまで行って握り拳をふり上げて、「コラッ」と言おうと思ったとたん、一番上のヤヨイちゃんが私の顔を見て、「園長先生、ジョウロがない」と一足先にいったのです。私は振り上げた手を持っていくところがなくなり、「ああ、ジョウロがないかい」とごまかしてしまっただけです。

実は、先生が前の日にハツカダイコンに水をやりながら、「明日、近所の子で気がついていたらお水をやりにきてね」とさりげなくいついたらいいのです。私は遊具を散らかしに来たという先入観でしか見ていないから、その子たちの心がわからないのです。ですから向こうが先に「ジョウロがない」といつてくれたからこそ間一髪で助かったものの、あの時に「コラッ」と叱ってしまったら、彼女たちはもう何もいわずにすぐ帰っていったらと思うま

いのちのやさしさ      いのちの出遇い

す。それどころか大きくなって結婚しても、保育園の前を通るたびに、あの時にあの園長は私を傷つけたと、一生涯うらまれただろうと私は思います。

そんなふうに「我は善なり、汝は悪なり」という目で見ているから、とかく人間は自分の物差しに合わないものは間違いだというふうに思ってしまうのです。それを「園長さん、間違っているよ」と、小柳ヤヨイちゃんが私に教えてくれたのです。つまり、小さな子どもさんが仏様の姿になって私に教えてくれたわけです。そういうことが人生のなかではいっぱいあるのです。そういうことに遭遇していくというのは、「ああ、そうか。私って自分のことだけしか考えていなかったな」ということに気づかせてくれる出遇いであり、それもいいちの出遇いといえるのではないかと私は思います。

よく似た話はいくつもあります。職員室へ入ってきた先生が「今日はちょっと考えさせられたわ」と、同僚に話しているのです。砂場で子どもたちが十人ほどで遊んでいた。靴をいたままなので、靴にいっぱい砂が入って歩きにくそうだった。そこで先生が「せっかく遊ぶのだったら、靴を脱いでいっちゃいよ」といったらしい。素直な子どもたちは、みんな「ハイ」といって走って行って、向こうの木陰に靴を脱いできたのです。こちらから見ると靴がばらば

らに脱いである。それで先生が「あら、お靴はどうして脱ぐの。なんかばらばらに見えるけど」といった。すると子どもたちが口をそろえて「先生、お靴は揃えて脱いできたよ」といったのです。普通ならそこで叱ってしまうのですが、その先生は心が豊かでした。ここからはばらばらに見えるけど、いっぺん見てようと、見に行ったのです。すると、なるほど一足一足はきちりと揃えて脱いである。ところが一列に並べていないから、遠くからではばらばらに見えたのです。その先生は「叱らなくてよかった」と、職員室に帰ってきて話していました。その話を聞いていて、私は深く考えさせられました。

つまり、私も自分を基準にして見ているから、先ほどの朝倉サホちゃんの作文にもあったように、場合によっては人を傷つけてしまう。そして、傷つけていることに気づけばいいけれども、なかなか気づかない。それがあたりまえと思っているから、「この頃、あの人変よ。怒っているみたいよ。私は悪いことをしていないのに、どうして怒っているんだろう」と思うのです。よく考えてみると、自分の言動で人を傷つけたり、怒らせたりしてしまっていることが多いのです。それは、目がみんな前のほうを向いているからです。目が反対に内側に、自分のほうに向いていればそんなことはないのですが、人間は幸か不幸か目が前向きだから、前の



いのちの出遇い    いのちのやさしさ

ほうはよく見えるのに自分の側は見えない。

それを見せてくれるものが私以外の他者で、つまり私にとっては子ども、皆さんにとっては友だち、そして生きとし生けるものすべてなのです。

今朝も七時半から保育園へ行ってきました。保護者の方がカブトムシをたくさん持ってきてくださって、もう一週間くらい飼っています。雄と雌を一緒に入れておくとすぐ子を生みますが、そうすると雄が死ぬというので、雄と雌を分けて飼っているのです。ところが今朝見ると、雌のほうがどういいうわけか十匹くらい死んでいた。カブトムシはスイカやメロンが好きだからと、朝、メロンの皮を持っていたのです。びっくりしましたね。カブトムシは玄関に置いてあるので、子どもたちも毎朝、園へ来るなりまずカブトムシを見ます。子どもは虫が好きですね。死んだ虫でも拾ってきます。

去年か一昨年の夏祭に、タダタカ君がセミを拾ってきた。「先生、セミが死んでいた」。「ほう、セミが死んでいたか。どうしたんやろな」。その前の晩に園の夏祭があって、花火をあげたのです。「昨日の花火でびっくりして死んだんやね」と言うのです。子どもはかわいいですね。今朝カブトムシが死んでいたので、「どうしようか」、「お墓を作ろうか」という話になっ

て、ばたばたしていたのです。

このように、生きもののかけがえのないのちが、死というものを通して私たちに語りかけてくるということがあるのです。

東京の国立がんセンターのお医者さんで、種村健二朗という先生がいらっしやいます。今夏も京都でお会いするのですが、その先生のお話を聞いていますと、がんで亡くなっていく人と毎日のように出遇っていらっしやるのです。そして、その亡くなっていく人が、命懸けで語りかけてくるというのです。それは、生あるものはいつかは必ず死ぬということです。いのちというもののほんとうの尊さがひしひしと感じられると話してくださいました。

最近ではみんな病院で亡くなりますから、おじいちゃん、おばあちゃんの亡くなるのに出遇う方は少ないかと思っています。臨終の場面に出遇うことがないから、現代はいのちそのものがよく見えないという実に不幸な状況があるのです。昔は病院で死ぬのではなくて、必ず家で臨終を迎えたものです。危篤になると親類や親しい人が枕元に寄り集まって、息のとだえていく瞬間を手を握ってじっと見守りながら、だんだん冷たくなっていくのを肌で感じとっていたと思います。

いのちの出遇い いのちのやさしさ

子どもの感性はそれは大変なものです。私のような年になってくると、もうその感性が鈍ってきています。皆さん方はまだまだ鋭敏なはずですので、それを掘り起こしてほしいと思います。

もう一つ、作文を紹介しましょう。四年生の高島チエさんの「小さな虫にも大きないのち」という作品です。小さい時の思い出話を書いているのです。

いくつの時だったでしょうか。確か四才ごろだったと思います。そのころの友だちは男の子の笹野君でした。笹野君と遊んでいると、道にアリの行列です。「踏んでしまおう。通れないよ」という笹野君に「うん」と私は答えてしまったのです。「待て、殺すぞ」、プリッと一匹。プリッ、もう一匹と、次から次へと踏んでいきました。なんとという悪いことをしていたのでしょうか。アリの身にならないで、思いどおりに、気のすむまでプリッ、プリッと。その時アリはどう思っていたでしょう。踏まれるアリ全部が「ワーツ、悪魔だ。殺される。大切ないのちがなくなってしまう。逃げろ」と。最後には「もう、やめた」なんていって、謝りもしないで、「行く、行く」といって行ってしまいました。アリさんごめんなさい。私はいけないことをしていました。悪魔でした。アリの大切な仏様から頂いたたっ

た一つだけのいのちを、私と笹野君の二人でこの世からなくしてしまいました。たった一匹のアリにもいのちはあります。小さな虫にも大きないのちがあります。一つだけ、たった一つだけあります。なくしてしまったらもうもらえないのちです。大切です。大切にしなければなりません。アリとかチョウとかトンボのような小さな虫も、みんながきらいなヘビ、マムシ、ナメクジにもいのちがあります。ワシ、スズメ、タカ、カラス、インコのような鳥にもあります。ネコ、イヌ、サル、ゾウ、タヌキのような動物にもあります。みんなにあります。でも一つだけです。だから大切にします。簡単に殺してはいけません。

……

こんなふうにつらい思いを書いた作文です。子どもの頃はそういう残酷なことをするものです。しかし高島チエさんは、どこかにアリを殺した罪意識が残っていて、四年生になってからそのことを作文に書かざるを得なかったのでしょう。四才の頃とありますから彼女にとって五年ほど前の話なのですが、それを書いているのです。

そのことはともかく、私たちの身の周りには、ほんとうに命を懸けて私というものを支えようというはたらきがあるのです。もったいないことだと思えます。

いのちの出遇い いのちのやさしさ

先ほどの岡村明彦さんについて、こんな話もありました。実は、岡村さんは数年前に敗血症で亡くなったために、私はご存命中に出遇えなかったのが残念ですが、NHKの「訪問インタビュー」を見て、岡村さんが大変きれいな目をしておられることにほんとうに感動しました。この番組で、彼はホスピスについて話していました。ホスピスは人間が病氣になって死に至るまでの看護のことです。仏教のほうではビハラーといっています。

余談になりますが、アメリカの病院には、必ずお医者さんとお坊さんがいるのだそうです。なぜかという、お医者さんは医学のほうから病氣を治し、お坊さんは心の病氣を治しに回ります。いくら薬を飲ませて治療しても、精神的に健康にならないと病氣は治らないというのでそのようにしているのです。日本では明治時代に西洋から医学が入ってきましたが、心のお医者さんはどうしたわけか伝わりませんでした。お坊さんが僧衣を着て病院へ行くと、「まだ早い」と白い目で見られる。ですからそれではいけないというので今、ホスピスとかビハラー運動とかが盛んになってきているのです。

このあいだ近所の、台湾から来ているお医者さんが話しておられたのですが、村の家々を往診に回っていて気がつくことは、同じ病氣であっても、早く治る家とそうでない家とがあって、

その間に大きな差があるということです。「どうしてそんな差があるのですか」と聞くと、家の中が温かくて、看護が行き届いてやさしさがあふれている家の病人は早く治る。ところが「お医者さんに診てもらっていればそれでいいじゃないか。そんなものはお医者さんに任せておいたらいいのや」という冷たい感じの家庭の病人はなかなか治らないということです。皆さんもおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんが病気になるたら、ほんとうにやさしい心で看護してあげてください。そのほうが早く治ってくださるのです。

話が脱線いたしましたけれども、岡村さんは最初はベトナム戦争の写真とか、世界の紛争の写真を書いて世界に告発していたのですが、晩年は、晩年といっても五十何才で亡くなりましたから私と同じくらいなのですが、人権問題としての視点からホスピスの運動を始めようとしていたのです。

体験学習ということで病院に入院し、鍵をかけられた病室で一晩過ごした。翌朝は別のところへ出張しなければならぬので、早く起きてドアを開けてもらおうとどんたいたいたけれども、時間がこないと看護婦さんは開けてくれないのです。「ちょっとすみません。開けてください」と大声を出していると、よばよばの精神病患者のおばあさんがやってきて、岡村さん

いのちの出遇い    いのちのやさしさ

に、「あのな、このドアは六時にならんと開かないし、看護婦さんがまだ寝ているから、どんなたたかないで寝させておいてあげて」といった。それを聞いて岡村さんは感心したということです。

園長さんや保育園の先生は、自分では子どもたちに何かを教える立場にあると思っているのですが、実は教えられる子どもたちの、病院でいうと患者さんのやさしさのようなものに支えられて、ようやくその職を務めさせてもらっているのです。このごろそういうことを強く感じるようになりました。道を歩いていても、そういう優しさがいっぱいあふれているのです。そういうことに気づいていくということが人間にとってどんなに心豊かなことかということ、私はほんとうに心から思います。

私にもちようど皆さんと同じくらいの娘がおります。昭和四十三年生まれですから二つか三つ上かもしれません、大谷大学でお世話になりました、卒業してからは滋賀県の石部町にある落穂寮という精薄児の施設に勤めております。先日も帰ってまいりまして、こんな話をしてくれたのです。

四月に就職してみると、その寮にだるまさんというニックネームのついている子どもさんが

いた。とにかく表情一つ動かさないので。座ったら座ったままで、自分で行動を起こすことができない。表情もない。そこで先生たちがだるまさんというあだ名をつけたのです。娘も前期の八月が終わるまではほんとうにだるまさんだと思っていたというのです。

ところがある時、子どもたちがけんかをしてワーッと泣き出した。「泣いちゃだめ」といいながらふっとだるまさんの顔を見ると、泣いている子どもを見ながら、そのだるまさんが涙をぼろぼろ流している。まったく表情もない、動きもない、ほんとうにお人形みたいな子どもだと思っていたのに、泣いている子どもの涙を見て、自分もぼろぼろと涙を出しているのです。はっとしたそうです。

そしてまた数日後、楽しい行事があってみんなよろこんでワーッと騒いでいた。すると、無表情なだるまさんの表情のなかに、かすかに体を動かしながら一緒によろこぶ姿が感じとれたというのです。

「それがどう感動したの」と私が聞くと、「だってお父さん、そういうことは私にはできないもの」と。「そりゃあ、子どもがけんかしているのに自分が泣くというようなことはできないだろうな。それで、あんただったらどうするの」と聞くと、「私だったら、泣いちゃだめ、



いのちの出遇い　いのちのやさしさ

どうしてけんかしたの、けんかしてはだめと子どもを叱ったり、引き離したりするのが精いっぱい、じっと見ながら涙ぼろぼろ流すなんてできない。「それが偉いのか」というと、「そう、偉い。そんなことできるのは仏さんしかないでしょう」というのです。

私もその話を聞いて感動しました。みんなが自分の命を懸けて一生懸命生きようとしているのです。そしてみんなそれぞれにすばらしいところがあるのですね。

金子美鈴の詩にこんなのがあります。金子美鈴というのは昭和五年ごろに二人の子どもを残して亡くなった下関の本屋の娘さんで、最近この人の詩が発見されて詩集が出ていますが、これは『ないおん』誌に紹介した詩です。「私と小鳥と鈴と」という題です。

私が両手を広げて

お空はちっとも飛べないが

飛べる小鳥は私のように

地面を速くは走れない

小鳥は空を飛んでいるけれども、しかし私のほうは地面を速く走れる。

私が体をゆすつても

きれいな音は出ないけど

あの鳴る鈴は私のように

沢山な歌は知らないよ

鈴は体を揺ると鳴るけれども、私は鳴らない。けれども歌は知っている。

鈴と小鳥とそれから私

みんな違ってみんないい

こういう詩があるのです。

実は、蜂屋学長先生から教えていただいたことがあるのです。一人ひとりの形、姿、人間と  
いうのは、仏様から照らされた光がずっと焦点を結んで、そこに像を創っているのだと。それ  
を私は蜂屋先生のエッセイを通して教えていただいて、「ああ、そうだな」と思いました。

だるまさんといわれている子どもさんの姿を見ても、そういう仏様の光が照らされていて、  
そこに焦点を結んでいのちの像を形づくっている。そこに悲しい時には一緒に涙を流して悲し  
んでいきましょう、うれしい時は僕もうれしいという、いのちのやさしさがあるのです。

時間が残り少なくなってきました。三年ほど前の話です。ダウン症のお子さんとカッチャン

いのちの出遇い いのちのやさしさ

という子がうちの園におりました。いつもは八時半に園に行くのですが、前日夜遅く帰ったのでその朝は疲れが出てもたもたしていると、園からのインターフォンで「カッチャンがいないのです。園長先生、すぐ来てください」といつてきたのです。

びっくりして、受話器を置くなり急いで家を出ました。ちょうど七月のことで、一週間以上も雨が降り続いていました。園舎の前に幅二メートルくらいの流れの速い川がある。ひよっとして思ったものですから、園に行く前に真っすぐ川に向かいました。ふと見ると、カッチャンのお父さんが先に探している。声をかけても蒼白い顔をして心配そうに川の底をのぞいたり、橋の下をのぞいたりして返事もしてくださらない。仕方がないのであわてて園に戻ると、子どもたちが十人ずつくらいでグループを組んで「カッチャン、カッチャン」と探し回っていました。「どうしたのだ。いないのか」「これで朝から三回目なんです」と先生がいうのです。カッチャンはその朝、自分の家へ帰ったかったらしいのです。

はじめは鳥小屋のところにいたのを連れ戻した。二回目は玄関から抜け出したのを連れて帰った。三回目は気がつかなかった。担任の先生も涙をぼろぼろ流して村中を探し回っている。そのうちに近所の人もだんだん気づいてきて、探しはじめた。園内だけにしておきたいと思って

いるのに、近所の人までがわいわい出した。

そのうち法人の理事の方が軽トラックを持ってきて、そこら中を走り回って探してくれる。川はしばらくいくと大きな滝のようになっていて、一段と流れが早くなっています。「こりゃ弱ったな」と思っておりまして。園から二十メートルほど離れたところにマーケットがあるのですが、そこのおじいさんまでが頼んでもいないのに地域の有線放送で「只今保育園の子どもさんが一人見えなくなりましたので、気づいた方は連絡してあげてください」と放送してしまったのです。

私はもう開き直って、事務室の電話の前にでんと座っていました。すると間もなく電話がかかってきました。年長児にもう一人タケちゃんというダウン症の子どもさんがいるのですが、そのお母さんからです。「うちの子どもは無事ですか」。「タケちゃんは無事です。元気に今、遊んでいらっやいます」。「ああ、よかった」。自分の子どもさんにハンディがあつたりすると、そのお母さんの敏感なこと。すごいですね。

受話器を下ろして数分経ったとき、また電話が鳴った。「岩田製材だけど、うちの玄関に見たことのない子どもさんがさっきから遊んでいるけど、これは保育園の子と違いますでしょう

いのちの出遇い    いのちのやさしさ

か」と。私は聞くなり受話器をバーンと放り出して、ころげるように玄関へ駆け出した。そこへ、お父さんが汗びっしょりで帰ってきた。「お父さん、岩田製材です」。お父さんはそこにあった誰かの自転車に飛び乗って走り出した。私も遅れまいと自転車を探したのですが一台もない。仕方がないから一生懸命走っていった。園から二百メートルくらい離れたところです。やっとの思いで岩田製材に着くと、お父さんがカッチちゃんをしっかりと抱きかかえて、それまで青白かった顔に血の気が戻って、ほんとうによかったという顔つきです。カッチちゃんは鼻をいっばいたらして、お父さんの顔を目茶苦茶に触ったりしてよろこんでいるのです。

それはほんとうに美しい光景でした。抱かれているカッチちゃんは確かにお父さんに抱かれていたのだけれども、カッチちゃんのほうがお父さんを抱っこしている。そのような錯覚に陥ったのです。父子が輝いていました。私にはそのように見えたのです。

いのちのやさしさとは、そういうものではないかと思えます。いのちのやさしさのお話をたくさんしましたが、目に見えないものがみんな私をやさしさで支えている。私は時には「我は善なり、汝は悪なり」というふう子どもを傷つけたりするけれども、実は、向こうがやさしさでもって私を支えていてくれる。

私は、いのちの出会いというのは、ほんとうの私というものに気づかせてくれるものであり、そういう出遇いのなかでたくさんの方々に支えられて、私は今日こうしてここに立たせてもらっているのだと、そのありがたさを常に心に感じられるような生き方を大切にしたいと思うのです。

まとまりのない話になりましたが、授業の時間がきていますので、これで終わらせていただきます。皆さん、ありがとうございました。